

水筒はいつの間にか竹筒に変わり、飯盒のみが腰にぶら下がっていた。疲れ果てた兵達に一番恐ろしい敵はマラリヤ、赤痢等南国特有の病魔であった。猛獣、毒蛇の住むジャングルに、険しい山路、病魔の餌食となり次々に倒れていった戦友達の死臭にも馴れて、屍の隣で露営の夢を見ることもしばしばであった。

非人同様の姿で山をさまよい、赤錆の銃も菊のご紋章があるが故に離さず、数発の銃弾と一個の手榴弾のみが日本兵たることを証明していた。七月初め泰緬国境の町コーカレーに着いた部隊は、全員が無遊病者のごとくでしかも兵員は出発時の半数近くに激減していた。過労が故にこの町で終戦を迎えるまでになお十数名の兵が病死した。

終戦

ニーカレー近郊の草原において英兵の機銃に囲まれて武装解除を受け、ムドンの捕虜収容所に送られ、敗れた故国をしのびつつ労役に服しながら迎え船の来るのを毎日毎日待っていた。

帰国と復員

英国が手配した復員船リバティ型一万トン級の船倉には、歓喜した兵達が夢にまで見た故国へ今戻りつつあった。沖縄戦に散った人々の霊に黙禱を捧げて、二日後の朝、水平線上に祖国の山影が見えた時は、誰の目にも涙がとめどもなく流れた。

昭和二十一年七月九日、呉の大竹港に上陸、故国の土を踏みしめて復員帰郷した。

あとがき

戦なき世の幸せな日々の暮らしに感謝致し、戦野に倒れた多くの戦友達に思いを馳せつつ、ただただ冥福をお祈り致します。

ビルマ通信隊

愛媛県 山本 義男

昭和十七年一月十日、丸亀西部三十八部隊師団通信隊へ入隊、お国のためと勇んで出征したが、家に残る病床の祖母、盲目の父、今後、私に代わって家庭の面

倒を見る立場の十七歳の弟、十三歳と九歳の妹、五歳の末弟の六人を残しての入隊であった。

軍隊生活の厳しさを聞いているだけに、懸命に心身共に鍛え、青年学校も本科、研究科共に無欠席で軍隊生活を目標に、励んだ。

軍隊生活は堪え切れないような苦勞であったが、一度は日本男児の通らねばならぬ道と、自身にいい聞かせて頑張った。通信技術も人並以上といわれ選抜で昇進。本部将校の当番兵を命ぜられ、その後は司令部勤務に服した。

昭和十八年十月ビルマ派遣を命ぜられる。橋八四二二部隊、これが丸亀三十八部隊の本隊であった。同年兵のほとんどが数回にわたって行っており、懐かしくもあったが、知人にも戦死者も多く、今度こそ最後と思つた。故郷からも弟が面会にきて、後のことをよく頼んだが、二年近く見ていない弟は丈夫に成長しており、これで心置きなく安心して、国のために尽くせると思つた。

昭和十八年十月二十五日、宇品港を出航して、東支

那海で敵潜水艦の魚雷攻撃を受け、船団はバラバラになり、ここで船団組み替えのため（中支）呉淞に寄港した。しかし船団は整えられず、二隻で出航した。呉淞では飲料水を補給したが、その時毒を入れられ、生水を飲んだ数名（私を含む）が下痢嘔吐で、船内の軍医がコレラと診断、香港へ寄港、入院を命ぜられた。しかしコレラではなく、大腸菌で、命拾いしたのであつた。

昭和十九年五月、サイゴン上陸。泰国行きの汽車を待ったが、長く便がない場合は、勤務にも付いた。

昭和二十年一月五日、待望のビルマの首都、ラングーンに到着、アラカンを超え本隊に着く。

昭和二十年四月、部隊はヘンサダに集結した。その時楯部隊が忠、勇、義、烈と隊名を変え、関東軍の新鋭部隊と宣布した。しかし効果はあがらず、戦況は到るところで敗戦の兆が色濃くなっていた。私たち松崎分隊は、昨日、斎藤参謀に同行して本隊に復帰したばかりであつたが、息つく暇もなく隊長室から呼出しが来た。分隊長と二人で行くと、

「エナンジョンに出た左縦隊の〇〇大隊からの連絡が取れなくなった。直ちに松崎分隊はこれを追及して、左縦隊の状況を連絡せよ。」

今夜〇〇時、輜重隊からトラックが一台来る。気を付けて行け、ご健闘を祈る。終わり。」

で隊長は苦も無い。しかし現況は最大の難所である（松崎の話）と聞く。だが、何が何でも行く外ない。

夕方トラックが来た。部隊からも大勢見送ってくれ、「気を付けろ」「元気で戻れ」と何時もながら、戦友とは良いものであると心から思った。戦友の一言一言が真に迫った別れの言葉と思えた。

トラックは月明かりのマンダレー街道を突っ走る。時々前方から来る車を止めて、前方の様子を聞いては走る。昼も荷台から敵機を警戒しながら走った。昼間は避難できる安全な場所で休憩し、様子を窺っては走る。二日目の明け方、歩哨が出て、車を止め、行く先を聞く。エナンジョンと答えて「何かあったのか」と聞くと、栗田中佐殿が来ておられ、その警備という。

「この先に、衛兵所があります。行って行く先を報告してくれ」といった。（栗田中佐は第五十五師団の高級副官で、松山出身）

衛兵所へ行き、行く先を報告すると、司令は

「昨日の明け方ビルマ国防軍が反乱を起し、英軍に寝返り、日本兵が少ないと見れば兵器を持ち逃げして、夜になると襲ってくるも狙うのは兵器のようだ。」と話された。おそらく、その対策のために、大佐も来られたのだと話した。

これから先は、夜は充分気を付けるように注意され、出発した。夜は明けたが、走り続けた。前門の虎、後門の狼とはこのことだと話しながら三時間ぐらい走った時、前方から五台のトラックが来て、先方の停止の合図で車を止める。車中に将校が見えたので敬礼をした。下士官が降りて来て、「部隊名と行先は」と聞くので、

「師団通信隊の松崎分隊が、エナンジョンの〇〇大隊へ配属、追及中」

と答えると「ご苦勞です。一寸待って」と将校の所へ

いつて何か話していたが戻つて来て、

「君達も知っているとと思うが、反乱軍が出て、単独の車や、少数と見ると、襲つて来る。我々も昨夜、この先の部落で、出先きの兵隊が殺られた。通報を受けて来たが、山へ逃げ込んだというが、現地人が同じ服装だから解らないが、まだいる。

車は何処かの部隊へ預けて荷物はノアレー（手車）でも雇つた方がよい。ここからは危険だから気を付けて、ではご武運を祈る」と言つて別れた。

この話を聞いて、輜重隊は「いや」というので車は帰してノアレーを雇うことにした。部落へ行き、酋長の家へいつて頼んだ。寸志も渡した。酋長が部落民の家へいつて話してくれ、行くことになった。人の良さそうな男であつたが、料金を先に欲しいといふので、決めた以上の三分分と、持ち合わせの品物も与えるとメマー（妻）もカレー（子供）も大変な喜びであつた。日が暮れて出発し、最初の小さい街も無事通過した。暗い夜の静けさの中でノアレーのキシム音が高く、こ

れが子守歌になるのか眠くなつてウトウトしながら歩いてきた。すると左の丘で電灯が点滅した。一分程で止まり、今度は右前方で点滅。止めたらこんどは前方で点滅する。皆が気が付いて、暗号を送つていつた。モールス信号ではない。ただ通過を知らず信号であろうが、射つこともできず、心地が悪いものである。何時何処から襲撃されるやらわからず、ノアレーを、中心にして二十メートルぐらいの間隔を取つて、前に四名、ノアレーに、馭者と二人、後方に四名の、配置で進むことにした。

何事もなく夜が明け、地形を見て、五名は少し離れた小高い丘の上に、残りの四名が牛車の側で、馭者は牛を曳いて草の茂みへいつて、交代で仮眠した。

二目も電灯の点滅はあつたが、襲つても来ない。三日目に、三時間ぐらいつた廻り角を曲がつた時、前を歩いてきた四人が小声で「止まれ、止まれ」といつながら走つて来た。「どうした」と小声で聞く。「戦車がいる。退れ、早く早く」といつながら、ノアレーの方向転換をした。皆も南條に威圧され、なすがまま

にした。

車が軋むので、音消しに、水筒の水をかけた。そして、南條について走る。四、五百メートル来て、角を曲がって話を聞くと、南條と他二名が角を廻ると戦車に出会い、「見付かった。」と思つて後の二人を押し戻したという。他の二人は、見ていない。南條のウロタエ方が尋常でないので驚き、見ずに戻つたという。「後を追つて来たなら、戦車の音がする筈だが」と松崎と私が偵察に行くことにして、連絡係りを、途中で待たせ出発した。

戦車を見た角の手前で二手に分かれ、私が丘へ上り、松崎が正面から連絡要員はそこで待たせた。二十分後に、戻つてくるように決めて出た。丘へ上るのに道が無く、音を立てないように、息を殺して丘上に出た。

見える、見える、ちょうど真下に大型の見たこともない戦車が連なつて三両、その先も何かがあるようだが、暗くて解らない。煙草の火のような灯りが、三個所で見える。起きている警備もいるが動く気配はない。私も決めた時間が来たので音を立てないように戻つ

た。松崎も戻つてきての話では角を曲がって十メートルぐらいの所に、見たこともない、大型戦車がこちらに向けて止まっていた。

角を曲がった所に、黒人兵が七・八人座つて、自動小銃を肩に眠っているようだった。戦車の前方は通路一杯の戦車で見えないと話した。

突破して進むか、命令に反して本隊に戻るか、協議したが、突破して左縦隊に行くのは決死である。死に行くようなものだ。話を黙つて聞いていた松崎が

「ヨシ、それでは私が分隊長として決を取る。前進は不可能と判断して本隊に戻ることに致します。全責任は松崎が取る。隊長が腹を切れといえれば見事に切つて見せる。」

と意気り立つ。すると誰かが、「分隊長だけに腹は切らさん。共同責任だ。」と口々にいった。「皆有難う」と松崎の目が潤んでいた。その顔は悲壮の中に秘めた覚悟の様子が感じられた。「行くも地獄、戻るも地獄、とはこのことだね。」といえ、
「頼むぜ、山本さん」と手を差し延べ、握り合う手に力が籠つた。

本隊に帰る足が重い。ただ無遊病者のように力無く歩く。小休止した所が竹藪の側で、松崎が竹を見て思いついたのが筏であった。「イラワジ河を流せば、いやでもブROOMに着く」と協議したら、それは良い、骨を折って歩くことはない。と意気投合、現地人に竹を切り出すための、道具を借り、一人手伝って貰い、夕方までに大きな丈夫な筏が出来た。装具や器材を積み込んで錨の代わりの石や、縄の代わりの葛等も積んで出発した。

夜明け方、十時間経ったので、上陸した。聞けば、十キロほど行き過ぎた部落であった。「上等だうまくいった」と。

国道へ出て、便借りをして、ラングーンに着くと、以前のラングーンとはうって変わって目当ての建物が無い。あちこちに大穴があり、全壊、半壊の家屋、行き交う軍人も戦々恐々としている。誰かが「悪いところへ来た」という。まったくついていない。どこかで必需品を探そうと三名が監視に残り、残りの六名が久し振りのラングーンの様子を見に出た。

松崎と南條と私が、公園の広場へ来た時、空襲警報が出た。同時に低空で樹上すれすれで敵機が来て、機銃掃射を浴びせた。私たちが咄嗟に、近くの個人壕に飛び込んだ。三人共、声が届く範囲にいた。鉄兜をしつかり被り直し、姿勢を低くしても首から上は外に出ている。二十メートルも行けば防空壕の入口があるが、行く間がない。頭を低く引つ込めて耐えた。

敵機は碁盤射ちをして終わつたと思つた時、空が暗くなるほどの、大編隊が来た。壕を出ることができない。頭上に敵機がいる時は、射たれても動かないのが、鉄則である。同時に、友軍も高射砲陣地から一斉に撃ち始め、応戦した。高射砲陣地は次々と、爆撃を受け、近くでも爆弾が降り始めた。このような時が一番怖いのである。戦争馴れをしていない者が飛び出る。広場の近くでも現地人が飛び出た。次の瞬間、ダアンという音と同時に、個人壕がグラツとした。頭をガンと叩かれた感じで、ポーとなった。しばらくして気がついたが壕がつぶれて動けない。無意識で這い出た。目が見えない、目を殺られたと朦朧とした中で思った。

手探りで両手、両足もある、耳も鼻もあるが、顔は痛みを感じた。痛みを感じ喜んだ。生きていると思つた。われに返つて松崎、南條と呼んだ。返事が無い、呼び続けた。立ち上がったが足が蹠いてブツ倒れた。目を押えてしばらく座つたまま動かなかった。永い時間座つたままいたような気がしたが、後で考えると大した時間ではない。

土煙が治まったころ、目が見える、嬉しかった。大声で「松崎」と呼ぶ。「山本さん」と、南條の声「オーイ大丈夫か」と松崎も私達を探していた。三人とも元気で助かったのは実に奇跡的であつたと、手を取り合つて喜んだ。

全員が元気でペグーの山へ逃げ込んだ。その翌日戦車数千台が来てラングーンは激戦になつた。ミンガラドンの南方の丘の上からその激戦を見た。山砲、野砲が撃つ弾丸は、大型戦車には通用せず、フトン爆雷でさえ、戦車が一尺ほど上り、一分ほどしてまた走り出す。なすすべもないとは、このことである。

昭和二十年八月十五日、仏印転進中、泰国、バンコ

クにおいて、連絡交信中、終戦を聞く。

同八月二十四日、仏印サンジャック到着。数日後(月日不詳)武装解除。数日後仏軍より兵器授与され、仏軍の指揮下に入り(一個分隊)、カンボジャ王城警備を命ぜられ服務(三週間ぐらいと思う)。

数日後、仏軍のマレ准将の指揮下に入り、元日本兵約一個中隊、通信隊一個分隊、地名不詳の〇〇河を約一昼夜上つた地点の共産軍、討伐に参加、元日本兵にも戦死者が出た。

昭和二十一年五月八日、内地還送のため「米山丸」に乗船、同五月二十二日、鹿児島港到着、上陸、同二十三日、召集解除、同二十五日帰宅。

帰つて驚いた、次弟も召集で南支方面に出兵、私が帰宅の十日前に帰っていた。祖母と末弟の二人が病死していた。内地を發つてから再度家からも、私からも手紙を出したが、これらは双方着いてない。家では私が死んだと思ひ陰膳をしていた。